

第3回福岡県生物多様性戦略専門委員会（議事要旨）

1 開催概要

日時：令和3年11月4日（木）9時～11時40分

場所：福岡県福岡西総合庁舎 4階会議室A

出席：朝廣和夫委員長、清野聡子副委員長、岩熊志保委員、宇根豊委員、上村真仁委員、須田隆一委員、勢一智子委員、馬場稔委員、皆川朋子委員（委員は五十音順）

2 議題

- (1) 戦略の構成（案）について
- (2) 第1章について
- (3) 第2章及び第3章について
- (4) 第4章について
- (5) 第5章について
- (6) 第6章について
- (7) アンケート結果について
- (8) 戦略策定スケジュール（案）

3 議事概要（○＝委員発言、●＝事務局発言）

- (1) 戦略の構成（案）について
（事務局から説明）
 - 資料1に沿って説明
- (2) 第1章について
（事務局から説明）
 - 資料5に沿って説明
- (3) 第2章及び第3章について
 - 資料5に沿って説明

（委員質問・意見）

- 資料1の左端の欄、福岡県生物多様性戦略の第2章 2.（2）の「⑥生態系をまたぐ現状と課題」にアンダーラインが引かれているのはどういう意味か。
- 構成を変更した部分である。生態系をまたぐ課題として従来から外来種や地球環境の変化などについて記述をしていたが、それを個別に項目立てをして、記述を拡充した。
- 第2章と第3章を分けたことは、福岡県の特徴をしっかりと出してい

くという点で非常に重要だと思う。生物多様性は、グローバルな問題だが、実際の施策は地域レベルでの取組が非常に重要である。特に、地球温暖化対策推進法の下では、これから地域の環境と再生可能エネルギーの導入加速を両立させるということで、市町村が再生可能エネルギーを優先的に導入する促進区域に関して、実行計画の策定が法改正に盛り込まれている。県の役割としては、県全体を見渡して、どこに環境配慮すべきかを示すことが求められる。自然環境や生物多様性を守るために、どの地域を保護すべきかについて、しっかり出していくという意味でも、この第2章は大事だと思う。

- 18 ページ、戦略の位置づけと役割という部分。関連計画が非常に多岐にわたり、内容をすり合わせるだけでも大変な作業量になると思う。PDCA サイクルを回すのも大変だということであれば、実務や運用レベルではなく、場合によっては計画レベルで重ねて策定することなどを改定時に考えていくことも是非お願いをしたい。特に気候変動適応の分野と生物多様性の保全は重なってくるところが多いので、セットでの検討やKPI（重要業績評価指標）を合わせるなど、いろいろなやり方があると思うので工夫していただきたい。
- 44 ページの「人と自然の関わり」の歴史」の1980年代から2000年以降は、県民が実感できるように記述を更に充実させたほうがよい。
- 再生可能エネルギーの導入に対して、この戦略がどこまで機能するのかなど、具体的に県として対応できるかという点についてはどうか。
- 市町村における促進区域の設定に当たり、県の地球温暖化対策実行計画において環境配慮基準を定めるという規定が地球温暖化対策推進法に設けられたため、所管課とも協議をしているが、実行計画も今年度改定作業中であり、計画への反映は検討中という段階である。戦略上の施策としては、139 ページに、「再生可能エネルギー導入に際しての生物多様性配慮」という見出しを入れているとおおり、記載をしていきたいと考えている。
- 今後計画が次々出てくると思うので、そのたびに専門家の意見を聞くなど、少し文章を足す必要があると思う。
- いくら地球環境に優しい技術であろうと、生物多様性は常に意識していくことを本気で習慣づけておかないと、温暖化対策が逆に生物多様性をある部分では壊してしまうこともあるので、そこも少し指摘しておく必要があると思う。
- 4 ページ「生態系サービス」、6 ページ「つながり」について。生態系サービスという言葉が、人間に役に立つ分かりやすいサービスだと言いつつ、言い過ぎているような気がする。人間以外の生きもの同士のつながりも

生物多様性にとっては大事である。人間が関与していない世界まで気持ちを向けていくような取組がないと、生物多様性にはプラスにならないどころか、生物多様性の理解をある意味で妨げてしまう。それを打ち破る大きなキーワードが「つながり」だと思う。6ページの「生きものの「つながり」とは？」で、生きもの同士のつながりを人間にとっての視点、生態系サービスとして片づけてしまうと、いかにも精神的なところまですくい上げているように見えて、上滑りで受け止めてしまう。しかし、もっと深い、その生きものに対するまなざしで、人間が得ているものはたくさんあるのではないか、あるいは人間が得なくても生きもの同士のつながりで、無意識のうちに我々は心地よさを感じたり、心の安定を得たりしている部分もあるのではないか。せっかくつながりという言葉が詳しく書いてあるので、もう一歩突っ込んでいけば、福岡県らしい戦略ができるのではないか。

- 44 ページ、年代の記述が古いように思う。別途確認してもらいたい。
- 田んぼから出るメタンガスについては、化石燃料でなければもうゼロエミッションではないかと思われている。また、最近バイオマス燃料はだめだという議論もあって、なかなか難しいところであるが、CO₂以外の炭素循環を否定してしまうと、いろいろな面で経済活動も含めて齟齬が出てくる気がする。そのあたりの記載を少し足すとよいのではないか。つながりのところは、例えば生態系ピラミッドの話のコラムとして記述し、人間以外の生態系や生態系間のつながり、生きものと水や空気とのつながりなども若干足すとよいのではないか。ワンヘルスのコラムがそれに近いと思うが、検討してもよいのではないか。
- 私は、幼稚園や保育園の子どもたちに生物多様性を説明するときは、「命（いのち）と命のつながりを感じてね」と言っているのだから、そういうところを足せたらいいのではないか。
- 賛成である。「命」という言葉は、「つながり」のところに入れたほうがいいと思う。
- 前回の専門委員会の議事録には、「生態系サービスという言葉で最初の戦略ではあえて使わなかった」という発言があった。今回は大きく打ち出されているが、取扱いを変えた理由はあるか。
- 「生態系サービス」は、第2期行動計画の6ページにコラムとして記載している。用語的な解説は必要だと考え、今回もコラムで入れている。ただし、福岡県戦略として考えたときに、命やつながりを加味して説明していくのは必要だと思うので、先ほどの御指摘も踏まえ、記載内容を整理したい。
- 資料5の92ページ「生物多様性を支える活動に関する現状と課題」に

ついて、多様な主体による活動という点、行政の計画だと県民と事業者と市町村というのが一般的だとは思いますが、活動には様々な方が関わっている。また、市民団体については狭い意味での保全団体にフォーカスし過ぎているのではないかと。162ページの「推進体制」では、多様な主体が書かれており、せめてそこに合わせた書きぶりのほうがよいと思う。また、県の計画であるため、県内での活動にフォーカスするのもかもしれないが、全国的な活動やグローバルな活動を行う団体と県の団体との関わりもあるので、そのあたりも書いてあげたいと思う。項目は変えなくても、中で追記することは可能ではないか。

- 162ページに列挙している各主体と対応していないため、再度検討する。
- 推進体制と責任ある活動団体を増やしていくことは、極めて重要。10年後を見越して、そういうセクターの充実や連携の強化、責任主体の強化や育成のような記述についても補充し、課題認識として持ってもらいたいと思う。
- 63ページの保護区について、生物多様性条約と関連する「生物多様性の観点から重要度の高い海域（EBSA）」というものがある。福岡県は3つの海域に張り付いていて、国内的にも国際的にも生物多様性上重要な場所であり、EBSAにも登録されているが、再エネ関係の計画がこのEBSAの海域で提案されている。県の環境部局においてもEBSAが十分浸透していないため、戦略に取り込んでいただきたい。EBSAに関しては、国内的にも大きく抜け落ちている。具体的な例として、国際的に移動する鳥類に関する条約、鳥類や哺乳類を含めたボン条約等があるが、日本は若干不熱心という評価をされている。一方で、日本列島はこれらの移動性生物にとっても非常に重要な場所であるので、日本列島を経由する鳥類の移動経路に無秩序に大型の風力発電が立地するということがあった場合、生物多様性の観点から、どういうスタンスを取るかということが重要になる。特に鳥類に関しては非常に重要な場所になっており、IBA（重要野鳥生息地）という国際的に鳥類を保護するエリアを対象に指定されているが、県内に重要なエリアがあることは、国際的にあまり知られていないので、そこはまた事務局と相談をしていきたい。法的には、海域は国管理なのか、県管理なのかということも整理されるべきだとは思いますが、県でも生物多様性ということを考えなければいけないと思う。生物多様性の観点から、ここは大事だというデータが記されているだけでも、計画論上は随分と違う。福岡県は、大都市であると同時に重要な海域も抱えている。生物多様性上重要な場所を最初に提示し、開発事業者に対しては十分理解し配慮することを示しておく必要がある。このため、63ページに重要な海域についての記述もお願い

したい。

- 洋上風力を導入促進するための法律ができており、所管が経産省と国交省である。本来であれば洋上風力の区域を決めるときにアセスをすべきだが、政治的なスピード感が早過ぎて、アセスを組み込むことができなかつた。今の洋上風力開発が制度的に問題のある状況であり、そうした制度的な課題も踏まえた上で戦略にしっかり書いていただいて担保してもらうことは必要だと思うので、検討をお願いしたい。
- 72 ページ、国交省のグリーンインフラの図が記載されているが、本文にはグリーンインフラの記載がないのもう少し出したほうがよい。
- 42 ページのカワバタモロコの写真は稚魚だと思うので、成魚の写真にしたほうがよい。
- 70 ページの写真、ナガエツルノゲイトウは世界で一番危険な外来生物といわれているので、ミズヒマワリよりもナガエツルノゲイトウのほうがよい。
- 地域循環共生圏のイラストは、スケール感がない。地域循環共生圏はもう少し広い概念であるし、資源循環はジビエだけでなくバイオマス燃料なども関わってくるので、うまく表現できればと思う。
- 第3章の現状と課題は、前回の表形式に比べて非常に分かりやすくなっている。ただし、重要な課題で欠けているものがあるかもしれないので再度見直しをお願いしたい。例えば、78 ページ（林業）に書かれている課題は確かにこのとおりだが、生物多様性の観点から、広葉樹林・混交林への誘導を入れるとか、あるいは、81 ページの二次草原・畦畔の項では、二次草原について課題が設定されていないので、全体的に確認されることを希望する。
- ワンヘルスについて、20 ページに樹木のイラスト、13～14 ページに記述があるが、生物多様性としてしっかり説明できていないと思う。もっと幅広く、健康よりも命でつなぐという表現を入れたらどうか。特に20 ページ、核として「命」を入れるとか、文章の中にも「命」という言葉を入れたら、生物多様性とのつながりが分かりやすくなるのではないかな。

(4) 第4章について

(事務局から説明)

- 資料5に沿って説明

(委員質問・意見)

- 目指す社会が2050年という点は、97 ページからの第4章でも分かるとういのではないかな。また、2050年までにどのようなステップを踏むかと

ということについて、例えば、2030年目標のSDGsはその後にバージョンアップするなど、それぞれの計画にあると思うので御検討いただきたい。

- 例えば19ページに少し追記するような感じになるか。
- 確かに2050年は、いろいろなところで使われている目標年であるが、次期戦略の計画期間が2022年から2026年までで、次が2050年となるとかなり間が空いている気がする。生物多様性条約だと2030年の目標を掲げて2030年までに陸域、海域の30%以上を環境保全エリアとする30by30に取り組むので、2030年を中期目標、2050年は長期目標のように位置つけたほうが施策もやりやすいような気がする。計画期間とその目標年との関係性はどのように考えているのか。
- 9年前に戦略を策定したとき、2050年を目指す社会の目標に設定している。国家戦略では2050年を目標に設定しており、そこが理由としては大きい。策定から9年が経過し、目標が変わるかということと大きく変わらないだろうということで、引き続き2050年を目標年としている。今回、戦略の計画期間を10年ではなく5年としているが、目標はあまり遠過ぎてても現実味がない、近過ぎてても大局観がないので、次期国家戦略の動向も踏まえ、考えてさせていただきたい。
- 福岡県は5年ごとに見直しているが、国内、国際の生物多様性の状況や政策によって前倒しされる目標もあるので、そこは書いてよいと思う。また、国際的には愛知目標などの目標やベンチマークの設定は10年ごとであり、GBO（地球規模生物多様性概況）などのセンサスも同様である。国の目標も10年ごとに進められている。その中で、現在の戦略で2050年に目標を設定していたので、現実的なところで5年ごと、そして2050年に設定するということであろう。19ページの計画期間に書き込むときに、そのように記述すればよいのではないか。
- 目標は道しるべである。それを中期と呼ぶか長期と呼ぶかは、物差しの違いである。そこは現在の戦略との整合もあるので検討してもらいたい。ただし、道の途中で想定されることがあれば、それは参考にしなければならぬ今後の経過になるので記載してもよいのではないか。
- 2050年はいいと思うが、世の中の価値観、あるいは資本主義のあり方も相当変わっているかもしれない。だから2050年の社会を想像することは難しいが、この文章を読んでいると相当大きく社会が変わるということは分かる。確かに書きにくいですが、今の価値観はもう大幅に見直されて、否定されて、新しい価値観になっているところがあるところがある。例えば、「みどりの食料システム戦略」では、2050年までに目指す姿として、日本の有機農業の面積を全体の25%、100万へ

クタールにすると明確に言い切っている。そのように目標を数字で示すことはインパクトが大きい。数値目標でなくてもいいが、明確な目標があると目玉になる。

- 国際目標としては2030年までに陸域も海域も保護区を30%にすることを目標にしているので、日本でも取り組むとしたら、各県も同様の位置づけになるので、EBSAなどを保護区として、もう少し管理を強化する、情報を収集する、関係する人と協議をすることで、国内的、国際的な2030年の目標と整合するものができると思う。
- 5年後の戦略では是非そういうマップがあるとよいと思う。その頭出しとして、今回の計画に一文を入れておくことは大事と思う。
- 環境省でも着々と準備を進められているので、OECM (Other Effective area-based Conservation Measures) などの制度を盛り込むことも、もうすぐ具体化して示されると思う。多分2030年はマストで入れないといけない。数値目標が段階的に設定されるとよいと思う。2030年もそうだが、2040年、2050年とイメージがあったほうがよい。前回の委員会でもコメントしたが、例えば兵庫県の場合は、「一種も絶滅させない」という目標を立てている。少しでも定量的に明示することは必要だと思う。
- 例えば10歳の子どもに、「自分たちが大人になったとき、未来がどう変わっていったらいいか」ということを書かせて、戦略に載せるとよいと思う。
- 今後5年間で収集していかないと、次の戦略には反映できない。環境教育の中で子どもたちにも聞いていく、そのようなことが事業化できるといいと思うが、それは運用で御検討いただくということで。
- 家の中や食卓の様子などをイラストにするなど、生物多様性とつながりながら自分の暮らしが変わっているというようなものがビジュアルで出せたら面白いと思う。
- 今は、SNSや情報のグローバル化も進んで、個人の動きのほうがコミュニティよりも大きくなりつつあるという時代の変化もあるので、個人の暮らしをどう考えていくかということは、個の社会における戦略のあり方として極めて重要な点だと思う。
- 地域循環共生圏のイラストは作成中ということだが、その理念からいくと、この前のページに出てくる森林や農村、都市など、それぞれ違う個性を持った地域が、その個性を豊かにして、それをネットワークでつなぐことによって生態系が良くなったり維持できたりということになるつながるはずなので、それぞれの異なるところがつながっているようなイメージのイラストが最後にほしい。このイラストで、それぞれの要

素が詰まってはいるが、少し離れたところにある地域が、自然の山や川の営みの中でつながっていくという融合感が示せないかと思う。少なくとも第五次環境基本計画の図は、農村と都市がそれぞれつながっているような形になっているのでその要素がほしい。

- 2050年までに社会がどう変わるかというビジョンも組み込んでほしい。102ページのイラストを見ると、屋上緑化などの重要な要素は入っているが、コンパクトに集約された市街地の雰囲気がいま一つ伝わってこない。将来的には人口も減るし、2050年頃には全国の居住地域の2割くらいは人が住まなくなるといわれている。自然環境が自由に使える地域と人が住む地域とをもう少し役割分担して、空間を使うことはできるはずであるし、都市部に住まなくてもデジタルで仕事ができるようになれば、仕事をしながら自然豊かな地域に住める町や村ができていく。ワーケーションも始まってきている。そうした先にどういう変化があって、どんな絵になるかということ、確かに子どもたちに描いてもらうといいかもしれない。更に20年、30年後が描ける要素が入るとよいと思う。
- 地域循環共生圏はなかなか難しい。例えば白黒ベースにして、つながりを太めの矢印で描き、いろいろなつながりの文言を書いて、そちらをカラーにするなどの表現はどうか。
- 環境省が流域ベースでの図を作成しているので参考にしてほしい。
- DX (Digital Transformation) という言葉が戦略に出てこない。DXは推進されているのでイラストは難しいと思うが、少し入れるとよいのではないか。
- 風土千年、都市は百年の計なので、まちをつくり変えるのは難しいところである。都市のイラストにはコンパクトシティの概念は入っているが、ワーケーションに関しては何も描かれていないので、農村や山村に少し言葉を足してもよいと思う。福岡県の戦略なので、福岡の都市像や暮らし像、まちと農山村が非常に近いことなどを少しイメージできると、関東、関西とは違った暮らし方が見えてくると思う。
- 例えば102ページ(都市)では、都市の中にも道端に草が生え、とてもかわいい花が咲いている。農村に出かけていくのも大事であるが、都市の中にも生物多様性がある。今、市民農園が活発で、都市農業の中でも市民農園の役割が大きくなり、相当評価が高まっている。単なる都市農業ではなく、市民農園という言葉を入れてはどうか。さらに、101ページ(農村)では、田舎の子どももまなざしもかなり衰えていて、もう道端の草には見向きもしない。田舎でも、虫捕りするだけではなくて、そういう子どもたちが身近な足元に目を向けているような、そのあたり

も少し描くとよいと思う。

- 農村は都市の人が憩いに行く場所ではなくて、今や田園回帰とか、むしろ農村での生活を選好する人が出てきている。オンラインなどでの仕事と農業、あるいは農村部でカフェなどを起業し、半農半Xと言われる暮らし方を選ぶ流れが生まれつつある。ワーケーションに加えて、より積極的に農山村で自然と共に暮らすことが選択肢となり得ている点もニュアンスとして出てくるとよいと考える。

(5) 第5章について

(事務局から説明)

- 資料2及び資料5に沿って説明

(6) 第6章について

(事務局から説明)

- 資料5に沿って説明

(7) アンケート結果について

(事務局から説明)

- 資料3及び資料4に沿って説明

(委員質問・意見)

- 生物多様性アドバイザー制度は、環境マイスターと同じ制度か。
- 生物多様性アドバイザーは、派遣経費の都合上、福岡県地球温暖化防止活動推進センターの環境マイスター制度に組み込む形で運用している。このため、生物多様性アドバイザーは環境マイスターにも重複登録されている。現時点では分かりづらい仕組みになっているので、今後見直していきたいと考えている。
- 第5章行動計画の施策の中に事業者への提案がある。マンパワーという意味でも大変重要で、行政だけ、自然保護団体、県民だけではできない。これからは事業者による生物多様性保全の取組が国際的に評価される。生物多様性保全は、脱炭素の次のテーマともいわれているので、事業者や企業などの取組を後押しすることが非常に重要だと思う。事業者の役割、あるいは自然資源を使用した事業に対する責務もあるので、県の戦略のコンセプトとして、そういうものも組み込んで体系的にやっていきたいというメッセージを第5章より前に出したほうがよい。企業の取組としてOECMを出す場合には、30by30 のことも出さなければならぬので書き方を工夫していただきたい。
- 113ページの情報総合プラットフォームについてであるが、関連する情報を一元的に提供することは非常に重要である。先ほどもDXの話が出

たが、事業者が事業活動の中で生物多様性に配慮するために、プラットフォームでデータを確認し、希少種がいるところには施設を設置しないなどを検討するためにも重要だと思うので、この拡充と情報の統合について特にお願いしたい。

- 脱炭素の関係で、気候変動に関してもかなりの情報がデータとして発信されており、例えば気候変動に関する情報とのリンケージも事業者などの利用者目線では必要と思う。あわせて、県がずっとこれを運営するのも大変なので、例えば、気候変動適応センターは生物多様性とかなり近い情報を発信していると思うのでそこと合流する、環境関係の情報のプラットフォームとして統合していくという方法もあると思う。
- 数値目標については、算出根拠が重要である。PDCA サイクルを回すためには、その根拠に基づいて見ていくことになるので、積算根拠や考え方について精査してもらいたい。
- 外来種対策については、人口減少が進んでいる上に人材不足、専門人材の不足が全国的に問題になっている。今後、外来生物法も改正されるので、おそらく自治体の役割が強化・明確化される。地域で頑張ってもらえないので、法改正や制度改正も見据えながら御検討いただければと思う。
 - 事業者の役割は、第5章よりも前のところでの記述を考えたい。数値目標については御指摘を踏まえ再度検討する。
- 数値目標の算出根拠は、各部で設定しているのではないのか。
- 御指摘のとおり、現状から何パーセント増を目指す、毎年何個ずつ増やすなどの考え方は、各担当課が整理している。県総合計画では設定根拠も併せて記載しているので、戦略にも記載するかどうか検討したい。
- 認知度の低さや、若者が団体に入っていないというアンケート結果を見ると、根本的な情報戦略の齟齬が出ているので、プラットフォームのアクセス数をはじめとするいろいろな数値目標において、各部各課が出している目標よりもちょっと高めに設定すべきではないかとも思う。
- 高校生では、生物多様性が授業に出てくるので分かっていると思うが、その上の世代はなかなか伸びない。
- 数値目標について、124 ページの目標 2-1 に関してのみ数値目標がない。今回の戦略では、12 の目標を掲げて、その到達点を数値目標で見ようという趣旨である。具体的な数字として出しにくいならば、例えば増加を目指す、あるいは維持を図るとかでもよいと思う。ここは重要地域に関するところで、生物多様性保全のベースとなるところなので、何らかの数値目標が必要だと思う。
- 数量的指標だけではなくて、質的な指標でもいいので、できるだけ対応

するものを入れていただきたい。

- 113 ページのプラットフォームは、情報発信のためだけのものか。例えばデータベースを活用しながら保全や重要地域に関して科学的に取り組むことも重要である。
- プラットフォームは、今まであった希少種の情報のほか外来種やその他の情報が集積されたものとなる。その中には GIS (地理情報システム) もあって、行動計画の一つとして挙げている重要地域の抽出にも役立つ情報を入れていく予定である。
- ならば構築という施策もあっていいのではないか。
- 行動計画 157 ページの生物多様性情報の収集・整理・活用に、福岡県生物多様性地理情報システムの活用がある。
- プラットフォームの行動計画にも、GIS との関係性が記述されるとよい。
- 施策の整理上、情報発信と専門的・科学的知見の収集に分けて記載している。
- 市町村への支援に関して、例えば 125 ページにある市町村の自然環境保全地域等の取組、また 126 ページのラムサール条約湿地に関する取組については、いずれも行いたいという市町村がある。しかし、熱心な住民はいるが、市町村自体が人手不足の状況。市町村の下支えがあつての県の計画なので、どういう連携ができるのか、何をどう支援するのか自体を 5 年間で考えていく必要があると思う。その仕組みづくりがうまくできれば、先ほどの情報化、あるいは企業への応援なども回り始めるのではないかと思う。
- 保全団体アンケートを見ると、主力が 60 代、70 代である。課題の一つ目は、希少生物関係は人が不足、データを取る現場が脆弱になっていること。二つ目は、例えば海ごみ関係であるが、企業はごみ拾いには参加してくれるが、生物多様性に関する取組には来てくれない。生物多様性に関する取り組みやすいメニューの提供や企業の様々な活動、ESG 投資や CSR レポートなどに反映できるような活動の工夫が必要。したがって、プラットフォームを通じて、保全団体の活動を知ってもらったり、団体のデジタル化において知識・技術が足りないところを手伝ってもらったりというような支援があればと思う。環境や生きものには興味はないが、デジタル化などに興味のある若者たちが、活動を手伝っているうちに興味を持つようになることもある。福岡県は活動のネタもあるし、IT の人材も豊富なので楽しいプロジェクトを作っていければバランスが出てくると思う。
- 121 ページの地産地消の推進はすごく大事だが、ただ地元で買ってきて食べればいいということではない。食卓で、生物多様性を少しでもいい

から認識する。例えば、「いただきます」と言うときに、「どこでとれた魚だろうか」と会話をする。どこでとれたのかということは、この生きものはどこで生きてきたのか、どういう命を育んでその命を人間に捧げようとしているのかということ。人間の食べ物というのは100%生きものだったもの。つまり、我々は生きものの命を殺していただくしか生きられない。だから、食卓でこそ、君はどこでとれたの、どういう一生送ったの、どういう生きものたち、どういう百姓、どういう漁師、どういった人たちと一緒に生きてきたのか、そういうことを思い浮かべるような「いただきます」、食卓の文化というのをもう一度取り戻さないといけないのではないか。是非、地産地消のところで、食卓の中で生きものや生物多様性を感じ取る、思い浮かべる、そういう新しい習慣というか、もともとあった習慣を改めて生物多様性という切り口で食卓に取り戻していくことを取り上げてもらいたい。

- 157 ページに生物多様性指標の開発とある。レッドデータブックに載っている種の指標だけではなく、身近な生きものの指標を開発できていないから、生物多様性はなかなか認知度が上がらない。福岡県は指標を作ったが、それを政策化できなかった。国も同様である。また国は、意欲的なみどりの食料システム戦略を作ったが、生物多様性はほとんど出てこない。そこがヨーロッパと日本の農業政策、環境政策の違いである。指標を政策化する研究会、検討会、議論を是非庁内で行ってほしいと思う。そうしないと、生物多様性がみんなのものになっていかないのではないかという私の提案である。
- 文化の話は、新しい戦略にも入れているので文言を足すとよい。政策は、農林水産部と環境部と一緒に作っていく必要がある。
- 戦略の前半で森林生態系、農地生態系、都市生態系、陸水生態系、沿岸・海洋生態系と分けられているが、行動計画における取組には偏りがあるように見えた。県の取組だから偏っているのだと理解したが、沿岸や海が少ないという印象を受けた。前段のところでは里地・里山・里海で海も含めているが、125 ページの重点プロジェクト6では里地・里山だけになっている。里海もつけておけば、海も入るのではないか。行動指針1の目標1-3は、里地・里山・里海なので、それらの生態系が網羅されているのか気になる。事業者や県民にはさらに取り組んでもらわなければならないというところが、もう少し強く出てもよいのではと感じた。
- 122 ページの策定の視点については、行動計画を立てる上で重要なところだと思う。1 番目にワンヘルズがあり、それは理念の重要性や県の施策としての重要性ということで十分理解はできるが、「貢献する」とい

う表現が気になる。生物多様性の確保もワンヘルスの実現も統合的なアプローチであるので、同時に達成するというニュアンスがほしい。ワンヘルス推進基本条例でも「ワンヘルスの理念を実践する」という書き方をしているので、「貢献する」よりも、「ワンヘルスの理念を実践する」という書き方が望ましいと思うので御検討いただきたい。

○104 ページに沿岸・海洋のイラストがあり、103 ページの河川・湿原のイラストにも中流域は描かれているが、いずれも汽水域がない。これから河川改修がかなり進み、河道掘削も始まっており、これが河口域にも及ぶため、今後、汽水域への影響が懸念される。88 ページの干潟の記述や104 ページのイラストにも汽水域が明記されていないので加えていただきたい。

●汽水域については、86 ページの河川のところで少し触れている。

○汽水域は海岸や藻場と同じぐらい重要なので、104 ページのイラストにも入れたほうがよい。

○県政モニターアンケートによると生物多様性戦略の認知度はわずか4.3%。県政モニターは意識の高い方達だと思うが、それですら4%である。さらにいずれも知らないという回答は4割以上という結果であるので、広報広聴について我々も含めて努力したい。

○アンケートでは、地域環境協議会もわずか3.4%という結果であった。なかなか難しいところだと思うが、ネットワークや連携のところで、協議会のあり方の検討について是非取り上げていただきたいと思う。

●行動計画の後ろに、ワンヘルス推進条例に基づいて、ワンヘルス実践のための基本方針に沿った行動計画をまとめているところであるので、その中で生物多様性に関するものについて記載をしたいと思っている。行動計画の最後に、ワンヘルス実践のための行動計画、生物多様性に関するものというような記載を今後考えていきたい。

(8) 戦略策定スケジュール (案)

(事務局から説明)

●資料6に沿って説明

(委員質問・意見)

○パブリックコメントに出すのは素案か。

●本日提出した素案に、いただいた委員の御意見をできる限り反映させた上で、パブリックコメントにかける予定である。コラムなどは間に合わない可能性がある。

○今回の意見をすべて反映するのは難しい部分もあると思うが、今後5

年間もしくはその次の戦略においても継続して取り組んでいくものである
ので、課題認識を持てるように一文でもいいので記載していただ
きたいと思う。

以上